

虹と日本文藝（十二）

——中古散文をめぐって（1）——

小序

本稿では、中古日本文藝中、和歌等韻文を除く散文、『日本靈異記』・『聖徳太子伝暦』・『竹取物語』・『枕冊子』・『宇津保物語』をとりあげ、そこに現われた〈虹〉について、比較文化的見地を混えつつ資料ごと個別的に小考を試みたい。なお、『竹取物語』『宇津保物語』では、〈虹〉のバリエーションと目される「天人」・「天女」・「龍」の問題に触れ、『枕冊子』では、難解な問題を孕む「をふさ」について〈虹〉との関連性を模索・考察する。

80

廿九年辛巳春二月 皇太子命薨于斑鳩宮 屋栖古
連公 爲其欲之出家 天皇不聽 八年甲申夏四月

荻野恭茂*

有_二一大僧_一 執_レ斧_二毆_レ父_一 連公見之 直奏之白 僧尼檢校
應_二中置上尼_一 扎惡使_レ斷_二是非_一 天皇勅之曰 諾也 連公
率_レ勅而檢之 僧八百卅七人 尼五百七十九人也 以_二觀勒
僧_一爲_二大僧正_一 以_二大信屋栖古連公_一與_二安草部德積_一爲_二
僧都_一 卅三年乙酉冬十二月八日 連公居_二住難破_一而忽卒
之 屍有_二異香_一而飮腹矣 天皇勅之七日使_レ留 永於彼
忠 逕之三日乃蘇甦矣 語妻_二□曰_一 有_二五色雲_一 如電如
度_レ北 自而往_二其雲道_一 芳如_レ雜_二名香_一 觀之道頭有_二黃
金山_一 即到_レ炫_レ面 受苑聖德皇太子侍立 共登_二山頂_一
其金山頂居_二一比丘_一 太子敬禮而曰 是東宮童矣

不_レ加_二打_一 諾_二字_一へ_二加_一 薨_二音興反_一 花也_二也_一 毆_二音安_一 斑鳩_二二字イ_一 卒_二也死_一 飮_二上音分_一 反_二音服_一 安草_二鞍也_一 安_二也_一 下音服

〔口〕粉貌（ニ合カ）詠之乃波（シノハ）蘇女（ミタ）甦（イタ）イキ
〔平〕利（シ）電（シ）炫（加）爰（己）童（奈）利（波）

私註 (一)『日本靈異記』(二)「信敬三寶得現報縁 第五」

(三) 仏教説話集 (四) 弘仁十三年 (822) ころ (五) 景戒
〔六〕 遠藤嘉基・春日和男校注『日本靈異記』——日本古典文学大系 70 —— (昭 42・3、岩波書店) (七) P 81～86 (八) 底本 真福寺本 校異 17 〃 電 〃 〃 二字国類 電 〃 東大寺要録
〔寛*〕 他校異は略 —— 線部は稿者による。底本は白文。

〔考〕 この資料では「ニジの如き美しい五色の雲」の言いである。すなわち「ニジ」そのものではないが、その文藝的比喩のイメージの中に、「ニジ」のもつプラス志向の特質が溶け入っている。それが「五色」であるのは、大いに「中国的」(cf. ②私註)である。また、引用本文の先に「黄金山者五臺山也」とある。五臺山は中国山西省にある五峰から成る山で、多くの寺院を有する山ということになっているが、「度北」りてその先に「黄金」の名を冠する「黄金山」が出現するのは、古代中国の「虹」(「対異散同」の吐金伝説(「891012」等)と、その発想において遠くかわりがある。広くはグローバルに広がっていた、かの「虹脚埋宝」伝説と水面下で繋っているのである。

さらに「虹」と「聖徳太子」が連想的に浮かびあがるための共通項は「神威ある存在」であろう。また、本章では、(秘められた)「ニジ」が、異界 〃 仏教世界への架橋の役も果たしている。

三年^甲冬十一月、大臣并入鹿、起二家於甘櫓、嶺、(優色)上。大臣家外作城垣、貯兵食。又氏々人等入侍其門、名爲祖子。濡者大臣傲奢、無君之意。日日彌深。焉時人危之。故天皇讓位於皇太子。自爲皇祖母尊。^(此の文、是後増改)
一説、甲、^改三年三月八日、東方種々雲氣飛來、覆^フ斑鳩宮上。連天良久而鎖^ク閉。又有種々奇鳥自上下、自四方飛來、悲鳴、或冲天、或居地良久、即指東方去。又溝瀆池川魚鱉咸自死。爛天下姓。主民填道合門哭、澆之聲、日夕不絕。又諸池水色皆變爲血。水鳥、鳥、又六月海鳥飛來、居上宮門。又十一月、飽波村有虹、終日不移。時人太異。又王宮有不識草、忽開青花須臾而萎。又有二墓如人立行。又有二赤牛。如人立行。又有元、無、並蛙、初、(滿清)王門、有少小子、諱弓射之爲樂也。又童子相聚、謠曰、盤上、(上)兒、狼、米、燒、米、谷、諸、而、今、核、山、羊、之、伯、父、又、謠、曰、山、背、之、菟、手、之、枝、枝、(支)水、金、丹、相、(支)杜、根、免、(支)手、之、枝、枝、(支)此、二、謠、始、起、王、子、孫、未、滅、之、前、王、子、孫、滅、後、猶、不、之、止、(止)又、說、^(此の文、是後増改)四年四月廿日、夜、災、斑鳩寺。而、舊、不、記、此、年、是、推、古、天皇十五年癸、又、(亦)說、曰、寺、被、災、(災)之後、衆、人、不、得、定、寺、處、故、百、濟、入、法、師、率、衆、八、人、造、楓、野、蜂、岡、寺。又、造、河、內、國、高、井、田、寺。又、百、濟、開、法、師、圓、明、法、師、下、水、君、新、物、等、三、人、合、造、三、井、寺、矣、(支)又、曰、太、子、平、生、之、日、常、嘆、曰、吾、得、合、意、妻、與、馬、恒、馬、子、未、得、石、天、下、六、位、最、秀、者、而、驅、使、然、命、禍、之、日、調、使、靈、不、離、馬、後、隨、靈、而、行、生、年、八、十、四、已、(已)年、死、其、子、足、人、年、十、四、出、家、住、大、安、寺、(支)又、(支)文、並、に、本、文、あり、(舍)人宮池、報、謂、太、子、生、年、十、五、之、時、始、爲、舍、人、改、好、田、獵、太、子、不、罷、壬、申、(壬)年、悔、過、出、家、住、法、隆、寺、禪、行、第、一、也、太、子、禮、之、太、子、堯、

私註 (一)『聖徳太子傳曆』(二)上卷「皇極天皇(三十五代?)

三年」の部より (三) 伝記・史書 (四) 延喜十七年九月 (917)
〔五〕 平中納言・藤原兼輔 (六)『聖徳太子全集』第三卷 (昭 19・7、龍吟社) (七) P 118～119 (八) —— 線は稿者による。
〔考〕 三月八日、六月の記述に見る天変地異の象は「虹下屬宮

中飲井水」を筆頭に記される様々な異象の記述——続く凶事を予兆する——もつ、『漢書』(Ⅱ52)を先蹤とする。十一月の「鮑波村有虹。終日不移。時人太異焉。」も、さわがしき世相の中に、しんとして不吉なことの起るであろう予兆を暗示する効果がある。又、「有虹。終日不移」は先引の『漢書』(Ⅱ53)中の「虹下……」と同様対動物的認識表現である。

聖徳太子は「虹」と比較的関係が深い。「虹」と何らかの関わりをもつものに、上つては『日本靈異記』(Ⅱ80)、下つては『聖徳太子絵伝記』(Ⅱ99近松①②)がある。

82

一 かぐや姫の生ひ立ち

いまは昔、竹取の翁といふもの有(り)けり。野山にまじりて竹を取りつゝ、よろづの事に使ひけり。名をば、さかきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。翁いふやう、「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給(あ)べき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて來ぬ。妻の女にあづけて養はす。うつくしき事がぎりなし。いとおさなければ籠に入れて養ふ。

竹取の翁 竹を取るに、この子を見つけて後に竹とるに、節を隔てゝよことに金ある竹を見つくる事かさなりぬ。かくて翁やうく豊になり行く。

この児、養ふ程に、すく／＼と大きになりまさる。三月ばかりになる程に、

よき程なる人に成(り)ぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。帳のうち(よし)も出ださず、いつき養ふ。この児のかたちけ(うら)なる事世になく、屋のうちは暗き所なく光り満ちたり。翁心地あしく、苦しき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬ、腹立たしきことも慰みけり。翁竹を取る事久しくなりぬ。いきおひ猛の者に成(り)にけり。

(中略)

二 貴公子たちの求婚

世界の男、貴なるも賤しきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、をとに聞きめでゝまどふ。その邊りの境にも、家のとにも、をる人だにたはやすく見るまじき物を、夜るは安きいも寝ず、闇の夜に出(で)て、穴をくじり、かひばみまどひあへり。さる時よりなむ、よはひとは言ひける。

人の物ともせぬ所にまどひありけども、なにの驗あるべくも見えず。家の人どもに物をだに言はんとて、言ひかゝれどもことゝもせず。あたりを離れぬ君達、夜をあかし日をくらす、多かり。をろかなる人は、「ようなきあ(り)きは、よしなかりけり」とて、來ず成(り)にけり。

其中になを言ひけるは、色好みといはるゝかぎり五人、思ひやむ時なく夜晝來ける、その名ども、石つくりの御子・くらもちの皇子・右大臣あべのみむらじ・大納言大伴のみゆき・中納言いそのかみのまろたり、此人々なりけり。

(中略)

これを見つけて、翁かぐや姫に言ふやう「我子の佛、變化の人と申（し）ながら、こゝろ大ききまで養ひたてまつる志をろかならず。翁の申さん事は聞き給ひてむや」と言へば、かぐや姫「なにことをか、のたまはん事は、うけたまはらざらむ。變化の物にて侍（り）けん身とも知らず、親とこそ思（ひ）たてまつ

（中略）

八 御門の求婚

さて、かぐや姫、かたちの世に似ずめでたきことを、御門きこしめして、内侍なかとみのふきこにのたまふ、「多くの人の身をいたつらになしてあはざなるかぐや姫は、いかばかりの女ぞと、まかりて見てまいれ」との給ふ。ふきこうけたまはりてま（か）れり。竹取の家にかしこまりて請じ入れて、會へり。女に内侍のたまふ、「仰（こ）とに、かぐや姫のかたち優（よ）におはす也。よく見てまいるべき由のたまはせつるになむ、まいりつる」と言へば、「さらば、（かく）申（し）侍らん」と言ひて入（り）ぬ。

（中略）

もてわつらひ侍（り）。さりとて、まかりて仰事たまはん」と奏す。これをきこしめして、仰せ給（ふ）、「などか、翁の手におはし立てたらむものを、心にまかせざらむ。この女もし奉りたるものならば、翁に冠を、などか賜はせざらん」。

翁喜ひて、家に歸りてかぐや姫にかたらふやう、「かくなむ御門の仰せ給へる。なをや仕うまつり給はぬ」と言へば、かぐや姫答へていはく、「もはら

さやうの宮仕へ仕うまつらじと思ふを、しめて仕うまつらせ給はゞ消え失せなぬ。御官冠つかうまつりて、死ぬばかり也」。翁いらふるやう、「なし給（ひ）。官冠も、わが子を見たてまつらでは、何にかはせむ。さはあるとも、なにか宮仕へをしたまはざらむ。死に給（ふ）べきやうやあるべき」と言ふ。

（中略）

御門仰（せ）給（ふ）、「みやつこまろが家は、山もと近（か）なり。御かりみゆきし給はんやうにて、見てんや」とのたまはす。宮つこまろ（が）申（す）やう、「いとよき事也。なにか心もなくて侍らんに、ふとみゆきして御覽せむに、御覽せられなむ」と奏すれば、御門にはかに日を定めて、御狩に出（で）給ふて、かぐや姫の家に入り給ふて見給（ふ）に、光みちて清らにてゐたる人あり。これならんと思ひて近く寄せ給（ふ）に、逃げて入る袖をとらへ給へば、面をふたぎて候へど、はじめて御覽じつれば、類なくめでたきおぼえさせ給（ひ）て、「許さじとす」とて、いておはしまさんとするに、かぐや姫答へて奏す、「わが身は、此國にむまれて侍らばこそ使ひ給はめ、いとおはしましがたくや侍らん」と奏す。御門、「などかさあらん。猶いとおはしまさん」とて、御輿を寄せ給（ふ）に、このかぐや姫、きと影になりぬ。はかなく、くちおしと思ひて、げにたゞ人にはあらざりけりと（おぼして）、「さらば御ともにはいて行かじ。もとの御かたちとなり給ひね。それを見てだに歸（り）なむ」と仰せらるれば、かぐや姫もとのかたちに成（り）ぬ。御門、なほめでたく思（しめ）さるゝ事せき止めがたし。かく見せつる宮つこまろを喜び給（ふ）。さて仕うまつる百官の人々、あるじいかめしう仕うまつる。

御門、かぐや姫を止めて歸り給はんことを、あかずくちおしく覺しけれど、玉しるを止めたる心地してなむ歸らせ給ひける。

(中略)

九 かぐや姫の昇天

(中略)

R 今とはて天の羽衣きるおりぞ君をあはれと思ひいでける

S とて、壺の薬をへて、頭中將呼びよせてたてまつらす。中將に天人とりて傳ふ。中將とりつれば、ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁をいとおしく、かなしと思しつる事も失せぬ。此衣着つる人は、物思ひなく成(り)にければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。

十 ふじの山(むすび)

その後、翁・女、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書(き)をきし文を讀み聞かせけれど、「なにせむにか命もおしからむ。たが爲にか。何事も用もなし」とて、薬も食はず、やがて起きもあがらず、病み臥せり。中將、人々引き具して歸りまいりて、かぐや姫を、え戦ひ止めず成(り)ぬる事、こまゝと奏す。薬の壺に御文そへ、まいらす。ひろげて御覽して、いといたくあはれがらせ給ひて、物もきこしめさず。御遊びなどもなかりけり。大臣上達を召して、「いづれの山か天に近き」と問はせ給ふに、ある人奏す、「駿河の國にあるなる山なん、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを聞かせ給ひて、逢(ふ)こそ涙にうかふ我身には死なぬくすりも何にかはせむかの奉る不死の薬に、又、壺具して、御使に賜はす。勅使には、つきのいは

かざといふ人を召して、駿河の國にある山の頂にもてつくべきよし仰(せ)給(ふ)。嶺にてすべきやう教へさせ給(ふ)。御文、不死の薬(の)壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰(せ)給(ふ)。そのよしうけたまはりて、つはものどもあまた具して山に登りけるよりなん、その山をふじの山とは名づけける。その煙いまた雲のなかへたち上るとぞ言ひ傳へたる。

私註 (一)『竹取物語』(二)(一)かぐや姫の生ひたち(二)貴公子たちの求婚(三)御門の求婚(四)かぐや姫の昇天——の章よりの抄

(三)物語(四)平安時代初期〜中期の頃か(五)未詳(六)阪倉篤義・大津有一・築島裕・阿部俊子・今井源衛校注『竹取物語 伊勢物語 大和物語』——日本古典文学大系9——(昭32、岩波書店)(七)P 29〜66中より抄(八)底本〳武藤本(流布本系に属し伝本のうち書写年代の明らかな最古の完本『六』本書凡例による)

〔考〕まず『竹取物語』の舞台、すなわち文藝上の空間は、御門とみ狩のみゆき(〳八部分)との関係で、巨視的には「京の都とその周辺」であろう。そのうち主たる場所は、古来竹林の美しさと狩場で名高い「大原野」とその周辺の山野を想定するのがよからう。京とその周辺には、その条件を充たすものに、洛南や嵯峨野もあるが、何と言っても、この物語を先蹤の一つとする『源氏物語』の「みゆき」の巻のみ狩りのみゆきの舞台として勇名を馳せた「大原野」あたりがよい。

その大原野の竹林を「野山にまじりて竹を取りつつ」(〳A)生活していた竹取の翁のひそみにならって、なるべく古代の面影を残していると思われる所を選び、実際に歩いてみる機

会を持った。その竹林の下の細々と通う道から上方を見あげると、わずかに洛西の空がのぞいていた。もし、この洛西の空に〈虹〉がかかれば、その尾は天を突く孟宗竹の秀に触れる。すなわち天界の美しい光りの精霊たる〈虹〉は、その竹の中の一本に天降るであろう——と空想してみても決して奇異には感じられなかった。

古代人にとって、竹は「よ」すなわち「うつろの中に（魂が）籠^{（住）}っている状態」の「節」（これは卵や石や果物と同様）があるわけで、その意味でも他界よりの〈まれびと〉の精霊が宿るものとしては格好の素材であつたであろう。またそれが、享受者にとつても不自然なく享受できるものであつたのである。洛西にその〈虹〉がたつとすれば、——京びにとつて

——光科学的にみてその時刻は「朝方」である。暁の雨霽れて太陽がやっと東の空に昇りはじめ、いまだほの暗い西山の竹藪の「竹の中にもと光る竹」（||B）を見出すとすれば、その時は「日の出の後間もない時」であろう。〈虹〉はいわゆる〈朝虹〉である。（※この点「謡曲羽衣」（||93）とも通う。「この児のかたちけうらなる事世になく」（||E）という清純な美しさへの感性は、千余年を隔てて、現代俳人・山田麗眺子の

朝虹の淨ければこそ妻に告ぐ
（昭26）

と深層心理の次元で共有される。
またその〈季〉は、天体環境として、勿論雨後で、「東の空に太陽が昇り——西の空にはいまだ残月の淡く浮かんでいるころ」すなわち月齢で言えば「十六夜」のころである。その残月が作者をして、「霓裳羽衣曲月宮伝来伝説」（『楊太真外伝』）を連想せしめても不思議ではない。（ちなみに同系の謡曲「羽

衣」には「雨はじめて晴れり。……朝霞、月も残りの天の原」とある。）とすれば、西山の竹の中に天降つた〈虹の精〉は、あたかもその残月の世界——月の都——からのものである——という発想による文藝上の構図・構想が見えてくる。

この名高い『竹取物語』の場合も、長い間に幾人かによる幾度もの推敲・潤色過程を経て、今や完本として表面上は跡かたもないが、幾多の比較研究資料を閲してきた目には、その奥の奥に〈虹〉がモチーフとして関与しているのが透視されるのである。

そこで次に、主に古代中国文化的なものであるが、〈虹〉の属性あるいは特性を裏に秘めている所を、資料に即して具体的に摘出吟味してみたい。

- (イ) 天降る。 B
- (ロ) 他界者すなわち精霊である。 B D E I M O—後部
P—前部 T
- (ハ) 致富・致富能力 C F P—後部 S—W
- (ニ) 恋愛ムード（陰陽の交接をめぐる） G H J L N
- (ホ) 五色？ H
- (ヘ) 『太平広記』(12) 所収の「首陽山〈虹〉」説話中に J N O
みる帝の求婚
- (ト) （架橋認識） V X Y
- (ロ) の R は浦島伝説と同類の異次元ゆえの「時間尺度」の相違である。龍宮城の「龍」も〈虹〉と同根のいわゆる「水霊」である。
- (ハ) は〈虹〉の吐金・財宝・出世賦与の属性で、グローバル

に広がっている虹脚埋宝説話とも関連するもので、その属性の発動の結果である。(ホ)の「色好みといはるるかぎり五人」の求婚譚は、「首陽山〈虹〉」説話からみると、話を複雑変化させ面白くするための後の挿入話のようである。「五人」の「五」は、(ニ)の属性を持ちつつ、陰陽五行説を内に抱く中国流の、「五色の虹」よりの「五」からの思い付きでの発想かも知れない。(虹)を食して生きる七匹の鬼の生態をユーモラスに描いて世界的に有名な絵本『虹伝説』(ウル・デ・リコ作)の鬼の身体の色が、それぞれ〈虹〉の「7」色である思い付きとも通じよう。

しかるに、後部「九・かぐや姫の昇天」の段に至っては一変する。すなわち「天の羽衣」とその特性を奥に秘めつつも、フルに活かした物語が展開する。『風土記』(＝[79]私註(考))で述べたように、いわゆる羽衣説話の「白鳥型」の参入である。「白鳥」は精霊の憑依・伝達者であることはまぎれもない。T中の「百人ばかり天人具して昇りぬ」の「百人ばかり」という複数は、その量の程度こそあれ、『風土記』にみる「天の八女」の「八」と同じ多数の義で、これはもはや〈虹〉ではなく群なす〈白鳥〉の生態を髣髴させる。しかしこの「白鳥処女説話」の痕跡は、「天の羽衣」の「羽」の一語に残すのみに、潤色され、そのモチーフは奥深く潜められている。すなわち、表には出ていないが、90%くらいは〈虹―天女〉型であり、末尾の10%くらいが「白鳥処女」型として組み込まれ、序破急の急の部分に見事なローマン的效果を発揮させている。

そして、この天女の化身Ⅱかぐや姫は、原資たる両者を源としつつも、見事に〈優美〉な〈もののあはれ〉の美学で装われ

別物の存在のごとくに――精神的にも美しく造型されている。

K部の「かぐや姫のかたち優におはす也」と「かたち」即ち「容貌」優美――これは原資の中国的(虹)の精とほぼ同位――の面を匂わせているが、先述の精神的に〈優美〉で〈もののあはれ〉を解する心は、人間と他界存在の化身との一時的な共存の間にも漂う。例えば、後の挿入部と思われる貴公子中五番目の中納言いそのかみまろたちの死に対し、ユーモアを旨とした「をこ物語」にもかかわらず、作者の筆は「かぐや姫すこしあはれと思しけり」と「あはれ」の情につき動かされている。また、本資料中にはないが、御門の求婚に際して「あまたの人の、心ざしおろかならざりしを、空しくしなしてしこそあれ。昨日今日御門の給はんことに(つかん)、人間やさし」とも、思いやりの心を示させている。まして、自分を慈しみ育ててくれた翁夫妻や、やんごとなき御門の愛については「変化」であることのしがらみを思わず越えて報恩にも似た〈あはれ〉の情(＝R)で対応している。帝の側として優しくなっている。(＝QU) もはや、原資たる〈虹―天女〉型説話や〈白鳥処女〉型説話による骨組みは、そこに見出すことの出来ないほどの豊饒な王朝美学――しつとりと優美なあはれの情――で見事に肉付け且つ装われているのである。すなわち、この本資料たるこの物語は、『風土記』(＝[78][79])などに見る〈虹―天女〉型・〈羽衣―天女〉型説話と比べて格段に質の高い創造的文藝精神の貢揚とその結果が見られるのである。

天の日矛の一団がもたらしたと思われる『風土記』(＝[78])の羽衣説話――稿者はそこに〈虹―天女〉型をみるが――のごとき帰化人疎外による悲惨さは、この物語には見られない。

否、言うなればその逆である。逆というのは言い過ぎかも知れぬ。なぜなら先述のごとく、人間と他界存在の化身とは、お互いにある時期、肉体的には合体し得なくても、精神的には確かに交流があつたからである。もののあはれを通して……。

しかし、「境界」という意味では（虹）とも通うが、「天の羽衣」を着た瞬間、その精神さえも異次元のものとなつてしまうという詩的飛躍^(注4)の創造は見事である。

恋えども届かず——そこに文藝美たる無限の（もののあはれ）が、また新しく滲出し、深々と揺曳してくる——のに気付く。

逸文「近江国風土記」を、たぶん先蹤としているものであるうが、その「伊香刀美」の歎きとは比ぶべくもなく深い。

この物の「著脱」による変身により、精神面も「変質」するという発想は、後世の仮面による芸術（能など……）や、高名な川端康成描く所の『伊豆の踊り子』の中の、主人公である。

「旧制」高生の私（超エリート）が、その制帽をカバンの奥に押し込んでしまい、それに代えて共同湯の横で買った鳥打帽を冠ることにより、質的に「脱自己」——すなわち心根は優しいが下級の生活者とされていた旅芸人・踊子一回の世界の者の心に変質すること——を目ざすモチーフの中に生かされている。もう少しエスカレートして考えれば谷崎の『春琴抄』なども入ろう。

S—Wの「不死の葉」についてであるが、かの浦島伝説の浦島太郎が、龍宮の乙姫さま（龍女）から別れぎわにプレゼントされた「玉手箱」との類想である。天界の天女である「かぐや姫」と海中の龍女である「乙姫」とは、ただ方向が違っただけで

本来同質の異界の者であり、（虹）の化身であると思われる。その異界、異次元の世界は、此界（人間界）のような無常の世界ではなく、永遠の生命を宿す世界である。その世界の靈氣（タマ）の憑依した物体は、当然人間界にはない神威的パワーを持つのである。

Y部の「煙」は、永遠にぬぐい去ることの出来ない性をもつ地上存在すなわち人間界の住人の煩惱——愛欲・憧憬等——の発露の象徴であろう。と同時に、天界（他界）への伝達手段、もう一つ広めれば交流手段をも象徴していよう。（天界のかぐや姫とていつ何時「天の羽衣」を脱ぐ——天界の人の心でなくなる——かも知れないという、はかない願望を秘めて……）

これは宗教行事としての茶吽の煙すなわち立ち昇る火葬^(注5)の煙の観察からの思い入れ、と同時に伝統的にグローバルに広がっている天界交通の手段たる（虹）への架橋認識との混融したものであろう。

『記紀』の〈天浮橋〉や『万葉』の〈天橋〉、また『風土記』の〈天橋立〉とも底通するものである。

この天界との交信、広くは精神的交通という内容は、愛する（地上では亡き）人の住む天界、すなわち夏の夜空に、その人が大好きだった夕顔の花のごとき「火花」を轟音と共に打ちあげるシーンを結末部に据える現代文藝の傑作『天の夕顔』（中河与一作）の手法の中に生かされ且つ受け継がれている。

さらに海彼に目をやれば、日本と同系の言語と類似した文化伝承をもつといわれるフィンランドの、著名な叙事詩（古代民族詩集）「カレワラ」^(注6)に（虹）が登場し、わが『竹取物語』のモチーフと共通する面が見出されるのである。

（注1）折口信夫「石に出で入るもの」（『折口信夫全集』第十五卷―所収）中。

（注2）資料[12]所収「首陽山（虹）」説話等。他に、（虹）の属性を示す面の根拠については、中国系の「比較研究資料」（1）（21）とグローバルに関連するものとして、同（22）（35）参照。

（注3）神田秀夫「天の日矛」（『国語国文』昭35・2）参考。

（注4）神田秀夫「羽衣説話」（『文学・語学』昭38・12）にも、このことに触れた文がある。

（注5）昭和十六年発行・文部省検定教科書『よみかた三』中の「ウラシマタロ」とその系列の筋の物語による。（すなわち、本来型の「乙姫」は龍宮の「龍女」の化身。有名な講談社の絵本もオトヒメは頭上に「龍」の冠をつけている。『万葉集』（巻九）中の高橋虫麻呂の作では、「海若の神の女」となっており、これは「龍女」と考えられ、「海若の神の宮」は「龍宮」と考えられる。ただし、「逸文丹後国風土記」の「浦嶋子」では、このオトヒメにあたるのが釣りあげた亀自身の化身「亀比売」。室町時代のお伽草子の「浦島太郎」でも、釣りあげたが助けてやった亀の化身の美しい女房、ということになっている。一方この女房自身「この龍宮城の亀にて候」といつている。

（注6）沢田瑞穂「連理樹」（『中国文学研究―第六期―』（昭55、早大中国文学会）中、中国南部の話として、このことに触れた記事がある。cf. [12]（考）。

（注7）資料[32]ならびに同（注4）参照。

83

三巻本
能因本（主底本）――彌（底本）・刈・勸・中・伊・古・内
前田本（三底本）・富・十・十二・十三・慶

いちさとのいち
いち
いち
はたつの市・・・・・つはいちはやまとにあまたあ・りなか
なる

はせ・す
に長谷・寺にまうつる人のかならすそこにとまりければ観音・
はつせ・いるに・る・くはんを

ん・の
の御えん・あるにや・・・心・ことなりおふ・の市・しか
つけ・のあらんころうさかいち

いち・いち
まの市・あすかの市・・・・・
いちいちあふりのいち

三巻本
能因本
堺本
をふさ――勸（ふ）イ無
おふ――慶おふさ
おふち時おふ〔ち〕無おほち

私註(一)『枕冊子』(二)第十四段(三)隨筆(四)平安時代中期(1000頃?)〔五〕清少納言〔六〕田中重太郎編著『校本枕冊子』(昭28・11、古典文庫)〔七〕P40~41〔八〕勸勸修寺家旧蔵本(三冊のうち、中・下巻)慶應慶安刊本 時三時知恩寺蔵本 無窮會文庫蔵本(井上頼因博士旧蔵本)

〔考〕『枕冊子』の本文研究は、現在もお進中であるのでいろいろ問題があるが、前田本の「おうさか」・堺本の「おふち」は、一まずおいて、「お(を) ふさ」について見るならば、(書写上の濁点の問題を考慮に入れつつ)吉田東伍著『増補 大日本地名辞書』第六卷(昭45・6、富山房)に、「相模(神奈川) 足柄郡」の項に、

小総郷 和名抄、足柄上郡駅家郷。延喜式、小総駅馬十二疋、足柄上郡伝馬五疋。○後の酒匂の駅家にして、往時は丸子川の左岸は、すべて足上郡の域内なりしを知る。

新編風土記云、小総駅は今郡中に遺名を伝へず、按ずるに大和物語、在原業平の次子滋春が東国下向の事をいへる条に、人の国の憐に心細き所々にては、歌よみて書きつけなごなしけるに、小総の駅と云ふ所は、海辺になん有ける、夫によみて書つきたりける「わたつみと人や見るらん逢事の涙をふさに泣つめつれば」云々、さては今の酒匂村の辺遺蹤と云んか。

また、「美濃(岐阜) 稲葉郡」の項に、

雄総 福光の東に接す、藤川記に美濃の名所をよみて「たなばたの逢ふ瀬は遠き鵲の尾総の橋を先づやわたらん」とあり、これは枕草子に、をぶさの市を載せ、夫木集に 仮初に見し計なるはし鷹のをぶさの橋を恋や渡らむとあ

るを本典とする如し。大和国八木の辺に小房あり、彼地の事なるを、此にも言ひかけてよめるならん。然るに岐阜の人は猶附会して、其橋址を此に求めんとするは、古意を得ず。(八木町大字小房)

この相模・大和説の他に、塩田良平に「伊勢」説(『枕草子評釈』、田中重太郎・池田亀鑑に「三河の小總」説(『日本古典全書』・『全講枕草子』)などがあり、様々である。しかしこれは『枕冊子』の場合に限って言えば、萩谷朴『枕草子解環』のいう「本段に京中の市としての辰の市に対して、大和の国の中の村里の市として挙げた中、海柘榴市に続くものとしての『をぶさの市』を考えるならば、これも亦、大和国中に存在するものと見るのが、極めて消極的ながらその論拠となる。『里の市』と、村里の市を指定しながら、『海柘榴市』一つでは、体を為さないからである。雲梯郷小房は、八木の南、檀原の北正に平城京から吉野に通ずる街道に沿って、市を開く場所としては不足はないものと推定する。」また、「平城左京の辰の市に始まり、大和国内の村里の市を二つ挙げて、やや遠く播磨の飾磨に移り、再び平城外京の飛鳥市に戻るといふ、地域的回帰性を見ると、これらの地名類聚も、単なる無作為抽出の列挙ではなく、やはり、一つのまとまった構想の下に類想せられた章段であることが知られる。」とある。妥当な見解と思う。しかし、この市に冠されている「お(を) ふさ」が、『日本国語大辞典』・『広辞苑』等という(比喻としての)虹(注1)かも知れないという視座は用意されていない。中世以前(虹)のたつ所に市を立てたことは、境界の問題と絡めて、今や、民俗学的常識(証例、『古事類苑』(注2)参照)である。とすると、これも一つの

〈虹〉の市、すなわちハワイのレインボーセールのようなもの、メラネシア・ミクロネシア諸島における〈虹〉とその呪詞を伴う原始的贈答交換儀式↓開市、のようなもの(35)〔考〕参照があつてもよからう。とすれば、それは、海辺でも川辺でも、時雨の通り易い山辺であつてもかまわない。ただ、『枕冊子』に限って言えば、先の説すなわち「奈良県八木の南檜原の北の小房」あたりを想定するのが穏当であろうというのである。くだって西行の名歌、

高野にまゐりけるに、かづらぎの山に、にうじのたちたりけるをみて

さらに又そりはしわたすこちしてをふさかかれるかづらぎのみね (『残集』)

の「葛城山」のある御所と奈良県八木の檜原は、〈虹〉的スケールで鳥瞰すれば、ほとんど隣り合わせである。よってこんな所からも先説に近づいてくる。「お(を)ふさ」は、「小総」・「雄総」・「小房」などの漢字が当てられているが、有史以前を含めた遠い昔、〈虹ニジ〉のよくだつ、またそれを目撃しやすい〈虹〉の名どころであつたことも考えられる。それゆえ開市も盛んであつた所。(中国の国際的市場にも〈虹口〉の名がある。)もしそうだとすると、その淵源と由来については、作者・清少納言の意識の中では既に希薄というより、霧消していたのであろう。なぜなら、中国(漢学)的教養に染まる平安時代貴族の常として、〈虹〉は忌避すべき妖怪(145参照)であり、特に女性である作者にとって筆に乗せるのもおぞましい淫猥な存在であつたに違いないからである。また無意識下に日本各地に見られる「虹指差禁忌」俗信も影響していたことも考

えられる。すなわち〈虹〉を示す語は作者にとって怖すべき禁制の詞であつたであろう。もし、を(お)ふさ(虹)の異名を知っていたなら、この場面に取りあげる筈もなかつたであろう。正面きつて〈虹〉についてみても逆に、民俗の様相の潜入した深層心理・中国的教養を除いて、もし純粹に清少納言の感性によつていたとしたら、『枕冊子』に、例えば、「心ときめきするもの」「心ゆくもの」「なまめかしきもの」、などの美的範疇に〈虹〉が入つていてもよさそうに思える。しかしそれがない。

因みに「お(を)ふさ」は、上代の『古事記』・『日本書紀』には見られない。韻文世界の、『万葉集』から勅撰八代集にわたる和歌の世界では、『千載』に一首のみである。「なふさ」は皆無。

『万葉』 ナシ

『古今』 ナシ

『後撰』 ナシ

『拾遺』 ナシ

『後拾遺』 ナシ

『金葉』 ナシ

『詞花』 ナシ

『千載』 ①

『新古今』 ナシ

① 421 ふる雪に行方も見えずはし鷹の尾房の鈴の音ばかりして

(隆源法師)

①の歌は、〈虹〉とは無関係のようである。とすると〈虹〉の語と同じくおおむね忌避されていることが知られる。ただし、

私家集の世界では、平安末期から中世にかけて、先の西行歌や美濃の雄総の中に引用されている衣笠内大臣・藤原家良の、

仮初に見し計なるはし鷹のをぶさの橋を恋や渡らむ

や、同項中の、一条兼良の藤川記(1423ごろ)中の歌

たなばたの逢ふ瀬は遠き鵲の尾総の橋を先づやわたらん

などが見られる。〈虹〉は天上のものであり、また古来、恋・

エロティズムと属性ともいうほど密接な関係を有する。〔1〕私

註〔考〕、〔7〕私註〔考〕、〔8〕参照)とすれば、これらは、名

所の地名——〈虹〉形(=彩美しいアーチ形)をした橋があり、

それに代表される地名——であると同時に、文藝上は、

〈虹〉の比喩(メタファー)のようである。それが「鳥」の「尾ふさ」と関係

を持つようである。

上考(『枕冊子』に関する)は、本文が正しくなかったら問題

にならないし、〈虹〉以外の意味の地名でありうる——とい

うことも保留しておきたい。

〔注1〕『和名抄』・『名義抄』にはこのような記述は見当たらない。

〔注2〕「天部歳事部一」P 316・317。二、三例を抄掲。

〔日本紀略 十四 後一條 長元三年七月六日丁巳、今日関白

(○藤原頼通)并春宮大夫家(○藤原頼宗)虹立、依世俗之説、

有売買事。

〔中右記〕寛治六年六月七日巳未、雨下或得晴申時禁中(細川

院)殿上小庭并南池東頭、有虹見事、……召陰陽頭成平於便所

有御占也、抑世間之習、虹見之處立市云々……廿二日甲戌、今

日又賀陽院殿、有虹見氣、同廿五日重被立市。

〔百練抄 五 堀河〕寛治六年六月廿五日、高陽院立市、依虹

蛭立也。

〔注3〕高木市之助・富山民蔵編『古事記総索引』(平凡社)によ

る。

〔注4〕國學院大学日本文化研究所編『校本日本書紀』(角川書

店)による。

〔注5〕柳田国男に、『をふさ』は『なふさ』の誤写か(『西は

何方』中「青大将の起源」)があり、念のため調査。

〔注6〕自然地名とすれば、フサは接頭語、フサは「塞ぐ」と関係

——山などに囲まれた地をいうか。(楠原佑介ほか『古代地名

語源辞典』(東京堂出版))

84

a—(1)

あすらいやますく

にいかりていはく、「なむちがるいだいの命をとぐめんとて、この

木一すんをうべからず。そのゆへは、世のちうは、佛になり給し日、

あめわかみこくだりまして、三年はれるたに、天女音聲榮をしてう

へし木なり。さてすなはち天女のたまはく、『この木は阿修羅の万劫の

つみなか。すぎむよに、やまより西にさしたるえだかれんものぞ。そ

の時にたうして三分にわかれて、かみのしなは三宝よりはじめてたてま

つりて忉利天までにをよばさむ。中のしなはさきのおやにむくひ、し

ものしなをばゆくするの子どもにむくひむ』との給し木なり。阿修羅

を山もりとなされて、春は花ぞの、秋はもみちの林に、。つみだにあ

そが給所也。たはやくきたれる

り、いはんや、そこばくの年月なでおほしこづくる、万ごうのつみほ

ろばさむ、あしきまのがれん、とてまかりこづくれるを、をのが一

分とくぶんなし。なにによりてか、なんぢ一分あたたらむ」といひて、たゞ

(はまむカ)
いまはさむとする時に、おほぞらかいくらがりて、くるまのわのごとなるあめふり、いかづちなりひらめきて、りうにのれるわらは、こがねのふだを阿修羅にとらせてのぼりぬ。ふだをみれば、かけること、「三分の木のしものしなは、日本の衆生としかげに施す」とかけり。あすはおほきにおどろきて、としかげを、なゝたびふしおがむ。『あなたうと、天女のゆくすゑの子にこそおはしけれ』とたうとびてはいく、「この木の上下（チイ）しものしなを大福徳の木なり。一寸をもちてむなしきつちをたゝくに、一万恒沙のたはらをいづべき木なり。しものしなは、こゑをもちてなん、ながきたからとなるべき」といひて、あらず木をとりいで、わりこづくるひゞきに、あめわかみこくたりましゝて、琴三十つくりてのほり給ぬ。かくてすなはち音聲樂して、天女くたりまして、うるしぬり、たなばたをよりすげさせてのぼりぬ。

a—(2)

春の日、のどかなるに山をみれば、かすみ。（わたりイ）みどりに、林をみればこのめけふりて、はなぞの、はなごかりにおもしろく、てる日のむま時ばかりに、ことのねをかきたて、こゑふりたてゝあそぶ時に、おほぞらに音聲樂して、むらさきの雲にのぼれる天人七人、つれてくだり給ふ。としかげふしおがみてなをあそぶ。天人花のうへにおりての給、「あはれ、なんぞの人か、春ははなをみ、秋はもみちを見るとき、われらがかよふ所なれば、てふとりだにかよはぬに、たよりなきすまはする。もしこれより東に阿修羅（ガイ）のあづかりし木えたまひし人か」とのたまふ。としかげ「その木たまはれる衆生な

り。かく佛のかよひ給所ともしらで、しめやかなる所となんおもひて年ごろこもりはんべる」とこたふ。天人のいはく「さらば我らがおもふ所ある人なればすみ給なりけり。天のをきてありて、あめのしたに。ひきてぞうたつべき人になむありける。われはむかしいさゝかなるをかしありて、こゝより西、佛のみ国よりは東（なか）なる所にくだりて、七とせありて、そこにわが子七人とまりにき。その人は、極樂浄土の衆にことをひきあはせてあそぶ人なり。

a—(3)

としかげ、天人のゝ給にしたがひて、花ぞのより西をさしてゆけば、おほなる河（あり）。そのかはより孔雀いできて、その河をわたしつ。ことをば、れいのつじ風をくる。それよりにしへゆけば、たにあり。その谷より龍いできてこしつ。ことはつじかぜをくりつ。それよりにしをなをゆけば、さかしき山七あり。その山より仙人ありてこしつ。

a—(4)

「汝はなんぞの人ぞ」とゝひ給時に、七人の人みな礼拜して申さく、「我はむかし、とそ天の内院の衆生なり。いさゝかなるをかしありて、忉利天の天女を母としてこの世界にむまれて、七人のともおなじ所にすまず、又あひ見ることかたし。しかあるを、ちぶさのかよふところより、とてわたれる人のかなしさに、なゝのともがらつどひてうけ給はるなり」と申に、文殊かへりて、ほとけに申給

a—(5) 天女の名づけ給し、とりあはせて十二、しう木もとりくはへてまきあげつ。

a—(6) かくて、この子十二になりぬ。かたちのうるはしく、うつくしげなる事とさらにこのよのものにもにず。あやにしきをきて、たまのうてなにかしづかるゝ、国王の女御、后、天女、天人よりも、かゝる草木の根をくひものにして、いはきのかはをきものにし、けだものをともして、木のうつほをすみかとして、おひいでたれど、めもあやなるひかりそひてなむありける。

a—(7) ……このうつほの人、ことをひきやみてあやしがり給へば、いときよげなる人たてり。子のいふやう、「いとめづらしきあやしきわざかな。ものゝねをきゝて、天人のくだり給へるにやあらん」といへば

a—(8) ……きよげにたぐひなくみゆるを、天女をゐておろしたるとおどろかれたまふ。

a—(9) こ君には、天人もえまさらざりけるを、みなゝらひとり給へりけるこそはかしこけれ。

b—(1) いづれもくかたちきように、こゝろよく、をしなべておひいでたまへるを、せかいの人「なをこの御ぞうは、たゞ人におはしまさず、へんげの物なり。天女のくだりてうみ給へるなり」ときこえ給。

b—(2) 百まんの神、七まん三千の佛に、御あかし御てぐらたてまつり給はゞ、仏神をのくよりきし給はん。天女と申すともくだりましなむ。いはんや、さばのひとは、こくわうときこゆとも、……

c—(1) ……あやしくたぐひなきすき物にて、「天女くだりたまふらんよにやわがめこのいでこん、あめのしたには、わがめこにすべき人なし」となんおもへりける。

c—(2) ……あるよりもいみじくめでたく、あたりひかりかゞやくやうなる中に、天女くだりたるやうなる人あり。なかより「これは、このよのなかになだゝる九の君なるべし」と思ひよりてみるに、せんかたなし。

d 「絵解」こゝは神泉。かんだちめ、みこたちつきなみ給へり。たむるんたまはる。藤ゑい、舟にのりてはなれたり。なかつ、きむたまはりてひく。雪ふれり。天人おりきてまふ。

e

ただちよきほどに、すがたのきよらなること、さらにならびなし。かほかたちさらにもいはず。なかつ、これをみるまゝに、ふぢつぽを思ひいでゝ、このきたのかたをさらにをやと思ひわすれは、いくなりし天女とぞ思ひいたり。

f—(1)

このことのぞうあるところ、こゑするところには、天人のかけりてきゝ給なれば、そへたらんとてきこゆるなり。」

f—(2)

君「なにか、いまは天女いまそかりとも、なにとかみたまへん。

g

又ことにとりかふる巻は、れん〇花ぞのにて、天人かけり給ひし時、よみあつめたるども、そのよししるせるなり。うへめで給ことかぎりなし。

h

さかの院は、らうくじく、はなやかにめでさせ給て、「きんのねをきくと、このありさまを見るとこそ、天女の花ぞのもかくやあらんとおぼゆれ」との給。

(傍線類は稿者による)

私註 (一)『宇津保物語』(二) a||「としかげ」 b||「藤はらの君」 c||さかのるん d||「ふきあげの下」 e||「内侍

のかみ」(※本により「初秋」 f||「くらびらきの上」 g||

「くらびらきの中」 h||「樓のうへの下」(三) 物語(四) 未詳(五) 未詳。源順(911~983)説『原中最秘抄』。(六) 宇津保物語研究会・代表笹渕友一編『宇津保物語 本文編』(昭48、笹間書院) (八) 底本||前田家本。

〔考〕『宇津保物語』で(ニジ)に関するものは、「龍」「天人」「天女」、それに天人・天女の派生的存在として、「天稚御子」「天人の「七人の子」、天女の「行末の子」すなわち、地上では俊蔭を始祖とする琴の名手の族流、また間接的ではあるが、「天女」に喩えられるほどに清らかに美しい地上の女性、例えば九の君・貴宮、等である。

まず「龍」についてみていくと、それは「a—(1)」「a—(3)」部に登場する。「龍」は(ニジ)の第一次認識 $\square \rightarrow \textcircled{A}$ 系すなわち「蛇」系の性状的発展をなしたものであるが、中国的にいえば、もともと俗界より仙界への「渡し舟」の機能を有するもの、つまり「龍舟」である。インド説話的にいえばこの「仙界」が「仏界」に相当するものであるが、「a—(3)」部の後部に「仙人」がでてくるので、仏教的ムードに包まれつつも多分に神仙的、中国文化的色彩が混在している。もしかすると、物語中の舞台の設定としての場所が、仏の国・西方インドに向かいつつ、いま一歩足を踏み入れていない、例えば「ビルマの堅琴」で有名なインドシナ半島あたり、との暗示的表現かも知れない。ともかく、(ニジ)の二次的認識たる「龍」に付与された「致福」能力にいささかながら貢献するプラス面の性能が素直な形で表現されつつ効果を奏している。

次に、「天人」・「天女」についてであるが、会話中のものを

含めて本物語では、「発動の主体」である場合と、美しいものの「比喩的形容」として使われている場合がある。前者が主であるが、後者にも「a—(6)」「a—(9)」「c—(2)」「e」「h」がある。これらも「□—④」系の性状的発展による「ニジ」の二次的認識による存在である。

天女についてみると、一部ギリシャ神話の、天上—地上間を駿足で往き来する伝達使・「虹」の女神・イリス（Ⅱ③①）と重なる。

「天人」についてみると、(イ)「天女」（Ⅱ女性）に対する「天人」、強いていうならば「天男」（Ⅱ男性）をいう場合と、逆に、(ロ)「天人」Ⅱ「天女」の場合、また(ハ)「天男+天女」すなわち両者を含めている場合がある。（「虹」を「ニジ」の雌雄を含めていう、すなわち「蜺」をも含めているケース——対異散同——と同様である。）「a—(6)」のケースには明らかに(イ)が意味され、「a—(7)」も、右大将の美称的形容中の「天人」であるから、いわば「天男」であろう。(d)などは(ロ)の認識がふさわしいように思える。「f—(1)」「g」部の「天人」などは、共通性を言っているものであるから(ハ)のケースのように思われる。この混同性・融通性は「a—(2)」の「天人」が、底本の異なる岩波日本古典文学大系本では「天女のいはく」とあり、「a—(3)」の「天人」も九道本では「天女」とあることから傍証されよう。しかしこの区別は、この物語における本質的効果に関してはさほど大きな問題ではない。要するに両者共、秘琴を媒体として《妙なる音楽》にかかわる「天界の人」として足れる。たとえ「いさゝかなるをかし」の罪を背負っているようにとも……。そしてその風貌は、超地上的な「変化物」と明らか

に見えるほどの「光り耀くやうな」「美しげなる」「清らなる」の形容で表現されている。そして、天人（天女か？）の降り立ちて舞う場所が、(d)部では「神泉」とされ、（ニジ）の水辺との繋りを垣間見させる。これはヨーロッパの俗信——③④後半部・③⑦—C——とも一面底通する。

「天人」「天女」に「羽衣」が著されていないのは、「白鳥処女説話」の混融以前の形態であるからであろう。

また、天人の「天降り方」であるが、「a—(2)」では、紫雲に乗って天降る、とありこの紫雲は、仏教的に潤色されたものであろう。もともと（ニジ）は雲から出たり、雲前、特に白雲の前においてその存在は鮮明である。よって（ニジ）の同胞ともいべき「龍」も雲を呼び昇天するのである。白雲やただの雲でなく「紫」雲であるところに仏教臭が匂う。

その点「龍」の出現・天降りの様相は「a—(1)」にみられるごとく「おほぞらかいくらがりて、くるまのわのごとなるあめふり、いかづちなりひらめきて」と、極く自然的である。

『竹取物語』の天女・「かぐや姫」は、地上の竹取の翁に、永遠の命をも含めた「物的至福」を与えて昇天したが、この『宇津保物語』は、選民的で、天女の職能的子孫——「才」の継承したる俊隆とその末裔に、秘琴を通して《妙なる音楽》を奏させることによりそれに見合う「至福——物・心両面——」を得さしめ、地上の人々に「精神的至福」感を賦与せしめているのである。

「美」と「水」と「致富」は（ニジ）の内蔵する特性的ファクターである。

天人・天女にまつわる本物語は、（ニジ）の文化の本質を奥

深く蔵しつゝ文藝的にイメージを膨らませたものであり、これを基軸として、宗教的・文化的さまざまな色彩を豊潤に施しつゝ、悲喜こもごも地上的・人間的煩悩により醸し出される葛藤を織りまぜて王朝的ロマンを壮大に構築したものといえるか。

「天稚御子」、天人の「七人の子」については以上に準拠する。

以上を仮説として提示するが、本文中に幾度も登場する「七」の数字が〈虹〉の「七」色と関係をもつかどうかは定かではない。

（注1）佐藤厚子筆「うつほ物語の『学問』——藤原秀英の人物像を中心に——」（『梶山女学園大学短期大学部二十周年記念論集』平1）

（注2）前田家本『宇津保物語』には、〈ニジ〉を暗示すると思われる固定的な〈橋〉型発想たる「天の浮橋」、これに縁語法を絡めた「夢のうきはし」はみられない。

①②……は、『梶山女学園大学研究論集』連載中の資料の通し番号である。

* 文化情報学部 文化情報学科